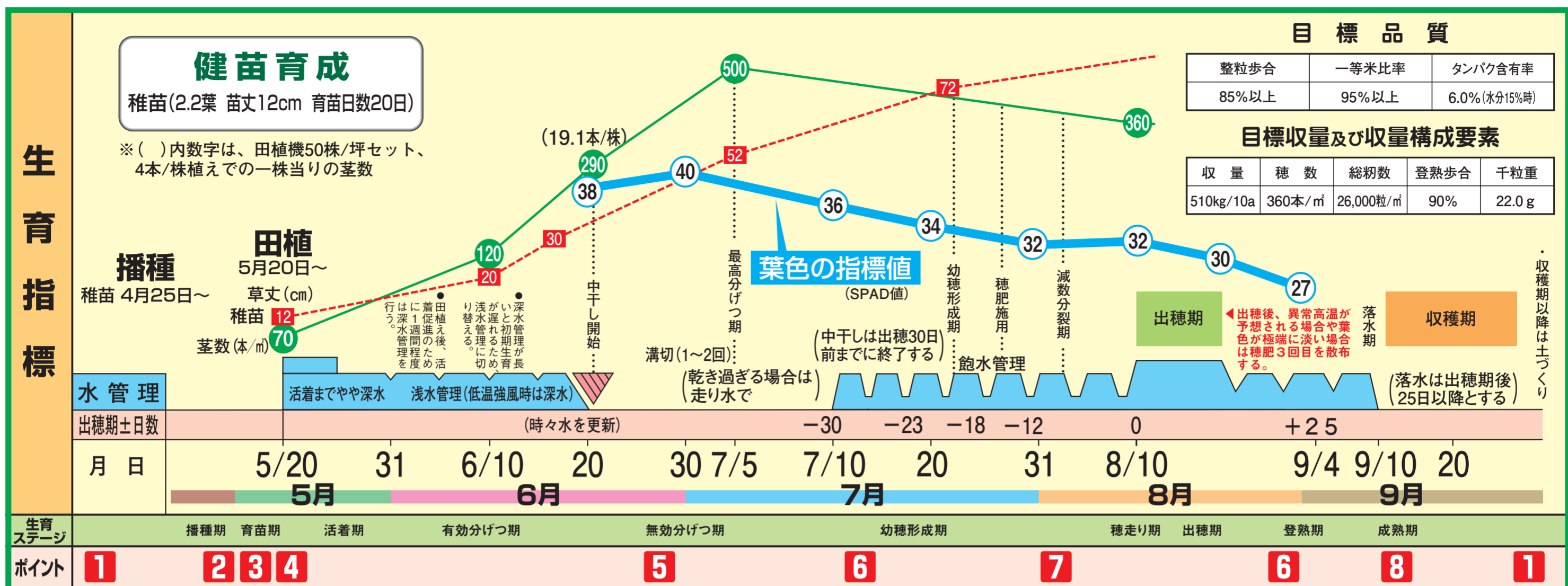


<魚沼米憲章を实践します>

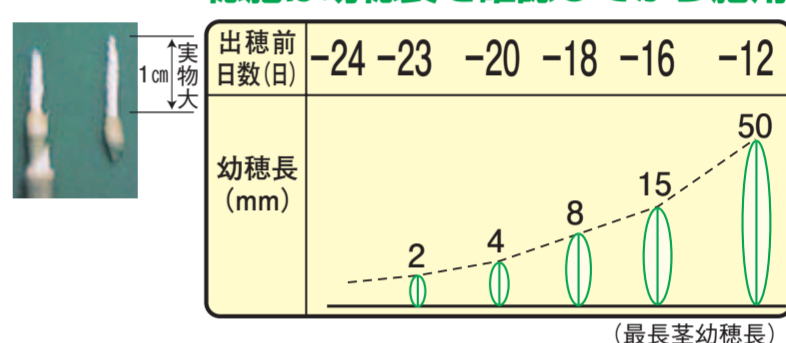
JA魚沼みなみ

「南魚沼コシヒカリ」栽培ごよみ



基肥肥料名	成分量(%)			基準 施用量	窒素 施用量	中間追肥 肥料名	成分量(%)			基準 施用量	その他 保証成分	使用時期
	N	P	K				N	P	K			
有機30魚沼ロマン500号	15	10	10	20~30kg	3.0~4.5kg	魚沼ロマン グルメエース		6		20~40kg	Mg:10, Mn:B:0.10	6月下旬~ 7月上旬
有機30魚沼ロマン側条専用粒状	12	15	12	30~40kg	3.6~4.8kg	マグコープ		17		20~40kg	Mg:3.5	6月下旬~ 7月上旬
有機30魚沼ロマンペーストS043	10	4	3	30~40kg	3.0~4.0kg	けい酸加里 プレミア		20		20~40kg	Mg:4, B:0.1, Si:34	6月下旬~ 7月上旬
有機30魚沼ロマン元肥一発	15	8	7	30~40kg	4.5~6.0kg							
魚沼ロマン有機専用	10	14	10	30~40kg	3.0~4.0kg							
有機50魚沼ロマン元肥一発	12	7	8	45~50kg	5.4~6.0kg							

穂肥は幼穂長を確認してから施用



気象変動に負けない米づくり対策ポイント

- 後期栄養を支える土づくり**
 - ① 堆肥などを入れ、後期栄養不足を防ぐ。
 - ② リン酸、ケイ酸等を施用し根や稲体を強くする。
 - ③ 10月15日頃までに稲わらすき込みを行うと、堆肥施用と同等の効果が期待される。
- 水田地力に対応した基肥設計**
 - ① 過剰生育が防止され、穂肥が確実に施用できる施用設計を行う。
 - ② 葉色値(SPAD)が32以下に低下しない管理を徹底する。
- 耕深目標15cm**
 - ① 耕深15cmを確保すると、根域が広がり、根量が増え、気象変動に耐えられる稲ができる。
 - ② 根域が深くなると、温度変化が少なくなるため、高温やフェーン現象の影響を受けにくくなる。
- 健苗育成で初期生育促進**
 - ① 健苗育成で根量を多くし、活着・初期生育をよくし、強い稲を作る。
 - ② 初期生育確保で適期中干しを行う。
- 早めできっちり溝切り・中干し**
 - ① 移植後30日頃から溝切り・中干しを行い、出穂30日前までに終了する。
 - ② 5cm以上の大ヒビが入るようなキツイ中干しは、根に悪影響を与えるため、避ける。
- 水管理の徹底**
 - ① 活着～中干しまでは、やや浅水管理を行い、分げつの発生促進を行う。
 - ② 中干し以降は飽水管理を徹底し、登熟向上・後期栄養の確保に努める。
- 生育、状況に応じた穂肥**
 - ① 穂肥2回目は出穂期10日前は節間長の伸長に影響しないため、原則として施用する。
 - ② 1回目を施用して、出穂期までSPAD値で32～33を維持できないようなら施用量を増やす。
- 適期刈取りの励行**
 - ① 高温年以外でも刈遅れは品質低下につながるため、適期に刈取る。
 - ② 1,100℃以内に刈取りが終了するようにする。

高温年の最重点ポイント

土づくり肥料や堆肥などを施用し、後期栄養不足を防ぐ!

- 特に地力の低い圃場は積極的に、地力向上を図る。
- 粘土鉱物等の施用をし、保肥力アップを図る。
- ケイ酸資材を中心に施用し、登熟向上や後期栄養維持に努める。

品名	特徴	標準施肥量(10a)
新ようりんリバック	火山灰土壌、基盤整備田に適し、リン酸は「く溶性」のため、土づくりに適している。	60kg
ようりんケイカル混合23号	名前の通り、ようりんとケイカルを同時に補給。秋落ち水田、老朽化水田に効果が高い。	100~200kg
魚沼ロマンアイアンスター	磷酸、ケイ酸、苦土(Mg)、鉄、腐植酸をバランス良く含んだ、土づくりマルチ肥料。	60kg
スーパーシリカプレミアム	ケイ酸分30%と多く、茎、葉を丈夫にし、倒伏軽減や受光態勢と登熟効果を高める。	60kg

葉色や気象などの状況のみて、穂肥3回目施用!

- 出穂期までSPAD値で32～33を維持できないと判断した場合は3回目を施用する。
- 稲体活力を維持して、登熟を向上し、品質低下を防ぐ。

【ポイント】出穂期までSPAD値32～33を維持できるか判断を行う。

	1回目	2回目	3回目(高温年)	備考
出穂前日数	12～15日	5～7日	出穂期頃	
施肥目安の幼穂長と施肥量	幼穂長 施肥量	幼穂長 施肥量	幼穂長 施肥量	
有機30魚沼ロマン穂肥専用	2～8cm 9～13kg	約18～20cm 9～13kg	- 8.3kg	(N)12 (P)4 (K)10
魚沼ロマン有機穂肥	2cm 10～15kg	約18cm 10～15kg	- 10kg	(N)10 (P)4 (K)12

的確な水管理と後期栄養の確保!

- 土壌が乾いていると地力窒素の発現が低下する。
- ケイ酸の吸収は幼穂形成期以降に多く、吸収には水が必要になるため、田んぼの乾かし過ぎには要注意。
- 中干し終了後～登熟期までは飽水管理を徹底する。
- 土壌を乾かさな水管理(飽水管理)で後期栄養を確保し、稲体や根の活力を維持する。

飽水管理のイメージ

水位 3～5cm

↑入水直後 ↑入水する この状態はダメ

適期刈取りの励行

- 高温年は950～1,000℃以内で刈取る。刈遅れは、胴割れや基部未熟に影響があり、品質低下につながる。
- 刈取り日はイネや穂の状況や積算温度を見て判断する。
- 高温年は適期刈取りを行い、ゆっくり乾燥させる。

● 高温やフェーン現象に対応するために、地耐力を考慮しつつ、用水確保が可能な時期までかん水を行う。

「最高の食味と品質を兼ね備えた米づくり」の栽培ごよみ

～生産履歴・農業規範は確実に記入しましょう。魚沼米憲章チェックシートも忘れずに!～